ASSOCIAÇÃO CENTRAL NIPO-BRASILERA　NOTÍCIAS E INFORMAÇÕES

BRASIL

ブラジル特報

No.1622
2014 年9 月号

花開くウーマンビジネス
桜井悌司　関西外国語大学教授

ブラジルの理系人材と日本企業
井上睦子　文科省大臣官房国際課国際戦略企画室長

あの町この町
沼田行雄　前在ベレン総領事

0円

一般社団法人 日本ブラジル中央協会
URL http://nipo-brasil.org/　E-mail info@nipo-brasil.org
〒105-0003 東京都港区西新橋 1-1-15 物産ビル別館　TEL:03-3504-3866　FAX:03-3597-8008　発行人：大前孝雄／編集人：岸和田仁

世界をむすんで、
未来をひらく。
BRA
2014-0827-321
ブラジルとめざす、明日がある。
事業投資を軸に総合力を活かし、
新しい価値を。
Photo: Dario Zalis / Vale
鉄鉱石の生産・販売で世界最大のシェアを誇る
ブラジルのヴァーレ社に、2003年から経営参画。
食糧の安定的な
供給のために。
子会社シングー社は
東京都23区の2倍に相当する土地で農業を展開。
ガス需要の拡大に応え、
暮らしや産業に貢献。
国営石油会社ペトロブラス社・州政府と共同で
ガス配給事業を推進。
挑戦と創造
三井物産
www.mitsui.com/jp

目 次

あの町この町
パラー州・ベレン……………………………………3
沼田 行雄

花開くブラジルの「ウーマンビジネス」…… 4
桜井 悌司

ブラジルの理工系人材育成政策の進展………6
井上睦子

日本は誠意では勝った
ーW杯日本代表支援委員会報告ー …………8
伊与田 明

ビジネス法務の肝
ブラジルPPP法の難しさ ………………………9
井口 直樹

ウーマン・アイ
「パラベンスの子育て」………………………… 10
窪田直子

ジャーナリストの旅路
インドとブラジル、比較すると…………… 10
岩城 聡

エッセー
日伯の“架け橋”750人の物語 …………… 11
藤村 修

映画監督カカー・ディエゲスの自伝的回想録……… 12
岸和田仁

時事論壇
食品は中国産よりブラジル産……………… 13
和田昌親

最近のブラジル政治経済事情……………… 14

これは役に立つ！ 会員へ2つの耳より情報 ……… 14

イベント／新刊書紹介 ………………………… 15

写真家田中克佳の「表紙のひとこと」

マラニョン州のレンソイス国立公園。純白の砂漠地帯にコバルトブルーの湖沼が連なる幻想的な光景です。

あの町、この町

パラー州・ベレン

悠久の大河アマゾンの河口に近い赤道直下のパラー州ベレン市は、人口約150万人、ブラジル北部第二の都市であり、2016年には市政400周年を迎える。マンゴの街路樹が続く美しい街並みやユネスコ世界無形遺産に登録された宗教行事「ナザレの大祭」（10月第二日曜日）でも有名である。この町が最も繁栄したのは、アマゾン地域が空前のゴム景気に沸いた、19世紀後半から20世紀初頭にかけてで、リオやサンパウロより30年以上前の1878年に落成したネオ・クラッシック様式のオペラハウス・平和劇場が、往時を今に伝えている。

アマゾン地域への日本人集団移住は、1929年9月、43家族189名のパラー州アカラ(現在のトメアス)到着に始まる。戦後、栽培に成功した胡椒がブラジルの主要輸出農産物となり、移住者達の救世主となり、地域経済の発展に貢献した。その後、胡椒栽培の衰退、出稼ぎによる人口流出で苦しい時期があったが、自然環境に優しい森林農法「アグロフォレストリー」が開発され、安定した農家経営が可能となった。最近、日本でも同手法で生産されたカカオやアサイを原料とするチョコレートやジュース等が多く流通するようになってきていることは喜ばしい。

現在、パラー州の日系社会は、約3.5万人、国内第三の規模といわれ、現地社会の信頼を得て大きな存在感を発揮している。ベレン空港で先ず目にする「BEM-VINDO A BELÉM, GENTE BOA!」（ようこそベレンへ、良き人々よ）と書かれたY・YAMADAグループの大きな広告パネルが、そのことを象徴的に物語っている。同グループは、北伯最大の小売りチェーンで、社長は全伯スーパーマーケット協会会長でもある。

また、日本政府は、円借款事業として「ベレン都市圏幹線バスシステム計画」(164.12億円)を進めており、バス専用レーン・BRTシステムの導入により、ベレン首都圏の人口急増に伴い深刻化する都市問題の改善が期待される。

（本稿は，筆者個人の見解であり、外務省の公式見解ではありません。）

沼田 行雄　前在ベレン総領事

花開くブラジルの「ウーマンビジネス」

国際見本市に見る

ブラジル人のファッションモデルが世界を席巻しつつあるという。リオやオリンダの海岸に行き、自由奔放な女性たちを見れば、それも納得。格好いい彼女らを取り込もうとするビジネスがはやるのは当たり前である。

関西外国語大学教授
桜井悌司

2003年11月から2006年3月までジェトロ所長としてサンパウロに駐在した。わずか2年5カ月という短い滞在であったが、駐在中の最大の楽しみの一つは、サンパウロで国際見本市を見ることであった。中でも興味深かったのが女性向け商品である。

ジェトロでは展示会や博覧会の業務に10年間従事していたこともあり、赴任直後に行ったことは、見本市関係者に面談し、ブラジルの見本市（フェイラ）事情を調査することであった。幸いにも、サンパウロ最大のアニェンビー展示場と第2のセンター・ノルチ展示場から「特別入場パス」を入手することができた。おかげで　駐在中に見た国際見本市は130本にのぼる。前任地のミラノでも同様のフリーパス・カードを貰っていたので、欧州の見本市大国イタリアの見本市と比較することもできた。サンパウロの見本市は、東京と比較しても見本市のビジネス指向性と規模において相当上回っている印象であった。見学したフェイラはすべての業種をカバーしていたが、最も楽しみとしていたのは、女性を対象とした数々の見本市であった。センター・ノルチ展示場等で、「HAIR BRASIL」「BEAUTY FAIR」等を見たが、いずれも会場一杯に、大きな舞台がたくさんつくられ、舞台上でプロのモデルや女性来場者をモデルに使い、スタイリストが次々と奇抜な髪型、エレガントな髪型を完成していくのである。隣のパビリョンでは、エステのデモンストレーションが、大々的に展開されている。

多数の来場者も我先に参加し、エステ療法を体験している。その隣には、化粧品やビューテイ用品が販売され、女性来場者が目の色を変えて購入している。女性来場者でムンムンである。

見本市規模は年々大きく

これらの展示会は、年々規模が大きくなり、「HAIR BRASIL」を最初に見た時は、19,000平方㍍であったのが、2013年には、65,000平方㍍にまで拡大している。他のライバル見本市の「BEAUTY FAIR」の規模は、2013年には、76,、000平方㍍とHAIR BRASILよりさらに大きい。

もう一つの「FCE COSMETIQUE」は、ドイツのニュールンベルグ・メッセの主催で、15,000平方㍍、出品者数、400社（うち外国企業50社）である。この規模を日本の同類の見本市と比較すると一目瞭然である。東京ビッグサイトでは、「ビューテイワールドジャパン」という展示会が毎年5月に開催される。主催は、メサゴ・フランクフルト・メッセ社であるが、総展示面積、34,360平方㍍、出品者数、515社（14カ国地域の出展を含む）となっている。他にもいくつか存在するが、見本市の一部を占める小展示会のみである。ブラジルの化粧品市場は毎年15%ずつ伸びているとは言え、その規模には驚かされる。

女性用の靴やハンドバッグ等皮革製品の展示会も大規模で、活気に満ちている。1つは、「COUROMODA」で、2013年には、展示面積、80,000平方㍍、出品者1,100社（内外国出品者50社）であった。東京ビッグサイトがすべて靴とハンドバッグで一杯というイメージである。一方、「FRANCAL」は、2013年実績で、展示面積、49,700平方㍍、出品者1,000社（うち外国企業45社）である。

いずれの展示会にも駐在中に何度も足を運んだが、女性を美しくする靴、ハンドバッグ、アクセサリー等が所狭しと展示されており、まるでミラノかと錯覚したものであった。東京でもハンドバッグや靴の小規模の見本市はあるが、サンパウロの規模とは比較にならない。

「FRANCAL」靴・ハンドバッグ・アクセサリーの巨大見本市

自動車も女性が主導権

次に自動車市場についてみてみよう。2013年のブラジルの販売台数は約377万台で、中国、米国、日本に次ぐ堂々世界第4位の大市場である。開発商工省の高官によると、2018年には464万台の生産規模に達するという。その背景には、ルーラ前大統領が推進した「ボルサ・ファミリア」政策で、中間層が急増したことから、小型自動車に対する需要が大いに高まったことがあげられる。前述のサンパウロのアニェンビー展示場の駐車場を活用し、毎週日曜日に「AUTO SHOW FEIRA LIVRE ANHEMBI」が行われる。2014年の予定をみると年間44回開催されることになっている。

自動車の購買決定においても女性の発言力は重要である。一家に2台目の女性用の車となると当然女性が決めることになるし、家族が初めて購入する場合でも、女性の意見が大いに反映されることになる。ブラジルは、市場調査のための各種アンケートが頻繁に行われる国で、「自動車を購入する際に女性がその決定にどのくらいの影響力を持つか」というような調査をインターネットで検索すると数多くの調査結果がヒットする。90%、80%、71%と様々であるが、いずれも、女性の影響力が強く、今後もますます強くなることが予想される。

最後に、女性市場への参入をめざす企業に対し、いくつかのアドバイスをしたい。

アドバイス１：時間と金をかけてしっかり市場調査を実施すること

日本企業は、総じて進出前の市場調査にお金をかけない傾向にある。ブラジル市場は常にダイナミックに動いているので、しっかりお金と時間をかけて調査をすることが望ましい。ブラジル市場の特徴は、外国文化をそのまま取り入れないで、ブラジル化した上で吸収することである。女性用製品でもブラジル女性の嗜好を徹底的に調べるという姿勢が必要とされる。

アドバイス２：サンパウロでの国際見本市の重要性を認識し、活用すること

見本市は商談の場でありかつ市場の情報収集の場である。ブラジル市場、特にウーマン対象消費財市場に着目する企業は、必ず見本市を視察し、デザイン、色、流行、価格、市場動向、販売動向、ライバル企業の戦略等につき調査をすることが重要である。

アドバイス３：感性豊かで、経営力、マーケテイング力のある人物の意見を聞くこと

2012年にオープンしたショッピングセンター「JK IGUATEMI」

多数候補者がいると思われるが、特に下記4名の方々を紹介したい。

【青木智栄子氏】ブラジルで最も知名度の高い日系人の一人。23の高級ホテルチェーンである「Blue Tree Hotels & Resorts」の会長兼CEOである。経営力が抜群で、常にサービスの質の向上とイノベーションを目指している。豊富な経験から女性ビジネスについても貴重なアドバイスが得られこと請け合いである。

【アンジェラ平田氏】「Havaianas」のサンダルを世界的ブランドに仕立て上げた。「Alpargatas社」の元国際部長として、マーケテイングに数々の創意工夫をこらした。ハリウッドの著名な女優にブラジルの貴石をつけたサンダルを履いてもらうことにより普及を図るという方法をとるなどお金をかけないマーケテイング手法を次々に打ち出し成功した。サッカーワールド・カップのタイミングに合わせ、国別のデザインのサンダルを市場に出したり、日本向けには着物のデザインのサンダルを売り出す等々である。著名な女性雑誌である「CLAUDIA」賞も受賞している。現在は、「Alpargatas社」のコンサルタントで、国際マーケテイングの会社である「Suriana Trading社」のデイレクター。ブラジル市場へのアクセスでも貴重なアドバイスが得られよう。

【池崎博文氏】ブラジルの化粧品の流通に大きな影響力を持つ人物。従業員5,000人を雇用する池崎商会（今年は創立50周年）の社長。ブラジル最大の美容見本市である「BEAUTY FAIR」を当時、サンパウロ最大の見本市会社であるアウカンタラ・マシャード社に対抗して立ち上げた。美容院用のヘアードライヤーを開発し、世界32カ国に輸出する。ウーマンビジネスを考える企業は一度は彼の哲学と経験を聞くべきである。

【細川多美子氏】細川氏は、上智大学を卒業後、25年前に渡泊した。現在、サンパウロでブラジルを紹介する自然と文化の情報誌である「BUMBA」誌を編集・発行している。サンパウロの市民生活を写真中心にまとめたジェトロ発行の「サンパウロ・スタイル」やクール・ジャパン・キャンペーンの仕事や日本食の普及などの仕事をしている。長年に渡って、ブラジル人のライフスタイルをフォローしているので、参考になる意見が聞けよう。

ブラジルの理工系人材育成政策の進展

井上睦子
（東大総長秘書室次長、文科省高等教育企画課課長補佐、東大国際部長、在伯大使館一等書記官を経て、現在、文科省大臣官房国際戦略企画室長）

安倍総理訪伯、関係促進のきっかけに

先月、安倍総理が日本経済を代表する企業トップ参加の大規模経済ミッションとともにブラジルを訪問した。ルセーフ大統領との会談をはじめ、日伯経済界を代表する賢人会議メンバーとの意見交換、サッカー関係者との集い、中南米政策スピーチ、日系人との懇談など大変精力的な日程をこなし、ブラジルに日本の存在感をアピールするとともに、様々な分野での日伯関係を促進する大きなきっかけになったと感じる。

日伯関係といえば、皆様何を思い浮かべるだろう。セラード開発による農地開発協力、ウジミナス、世界最大の日系人社会、最近では地デジ日本方式の採用と日伯方式のアフリカ展開といったところだろうか。柔らかい話では、日本でカフェに入ればここでもボサノバ、あそこでもボサノバ、と、ブラジルよりボサノバを日常生活で耳にする機会は多く、この浸透度はなかなか凄い気がする。もちろんサッカーも真っ先に思い浮かぶものの一つだろう。ジーコ元日本代表監督をはじめ多くのすばらしいブラジル人サッカー選手がJリーグでプレーし、東日本大震災の時にはチャリティ・マッチを開催してくれた。ブラジルのクラブチームで日本人プレーヤーといえば、やはりキングカズか。彼が今でもサントスでなんとも温かい笑顔で元チームメイトや関係者と話をしているのをテレビで見て、カズの存在感は凄いのだと感じるとともに、何か誇らしく思う。

さて、このように、多くの人が思い浮かべるであろう日伯関係の象徴的な事柄となるにはまだまだ遠いが、本稿では、3年前にルセーフ大統領の肝いりでブラジル政府が始めた理工系人材育成政策「シエンシア・セン・フロンテイラス（国境なき科学）」で、徐々に進みつつある日伯の産学官が連携した取り組み、を紹介したい。

シエンシア・セン・フロンテイラス

「シエンシア・セン・フロンテイラス（国境なき科学）」は、ルセーフ大統領が着任した年に彼女の肝いりで立ち上げた、優秀な理工学系のブラジル人学生を外国留学させるブラジル政府の奨学金プログラムである。中長期的に持続的な経済社会の発展を支えるのに不可欠な理工系人材の強化をはかるため、短期的な政策効果を生む、大規模なインフラ整備等をまとめた成長加速化計画と並行して実施されている政策である。

2011年から2015年の間に計10万人の学部生、博士課程及びポスドク等を留学させるプログラムに対し、経済成長が期待されるブラジルに対し熱い視線を送る世界各国が、今度はブラジル人留学生獲得競争に乗り出した。放っておけば、やはりアメリカ合衆国、そして言語の近さでラテン系言語の国々に学生が流れるところを、ドイツ、イギリス、韓国などが、それぞれの教育、文化、科学技術を所管する省庁、政府関係法人、大学、研究機関そして企業がブラジル人学生を引きつける取組みを行っている。

ドイツは、化学系を中心にドイツ企業が最も多く進出している国がブラジルということで力が入っている。イギリスは、ブリティッシュ・カウンシルがサンパウロとリオデジャネイロにオフィスを持っており、一定の家計所得に満たないブラジル人学生に対して、イギリス留学のための英語試験IELTSの準備コースを無料で提供するなどブラジル人学生にとって魅力的なサービスを提供している。韓国は、英語による授業を強化したり、ブラジルが大きな市場となっているヒュンダイが大変積極的にインターンシップを受け入れ

13年末にサンパウロ大学で行われた日本留学セミナーの学生用ブース

たりして、ブラジル人学生を引きつけている。

日本に約200人のブラジル人学生

日本は、2012年7月、(独)日本学生支援機構とブラジルのCAPES(高等教育支援・評価機構)及びCNPq（国家科学技術審議会)が、学部学生を対象とした日本の受け入れ大学とのマッチング及び博士過程学生受入可能大学に関する情報提供等に関する覚書に署名したのを皮切りに、「シエンシア･セン･フロンテイラス」による学生受入が始まった。署名時にはブラジルからCAPESのギマランエス総裁をはじめブラジルを代表する約30名の大学関係者が来日し、日本の大学や研究機関を訪問するなどして、日本を知ってもらう機会となった。そして、主には、2013年の春、秋、2014年の春と3回の学部生受入により、合計約200名の学生が日本の大学などで学んでいる。2012年8月に初めて開催したブラジルにおける日本留学説明会も、2013年、2014年と毎年開催され、毎年10程度の大学が参加している。少しずつではあるが、日伯の大学間でお互いの認識と理解が深まりつつあると思う。また、今年の7月現在で、IHI、王子ホールディングス、ソニー、東芝、東洋エンジニアリング、パナソニック、三井物産、三菱重工、三菱商事、三菱東京UFJ銀行、三菱電機及び三菱商事がインターンシップ受入を表明しており、実際の受入も始まっている。ブラジル人学生にとって魅力的な就職先候補となりうるこれらの企業でのインターンシップは日本留学の魅力の大きなポイントであり、日本の大学や企業の国際化、そして、教育の国際産学連携のモデルのヒントとなる取組みが進展することを期待する。

日伯の産学官連携

ここで一つ、将来的に日伯協力の象徴となりうる両国間の産学官が連携した教育・研究のテーマとその取組み状況について紹介したい。今般の安倍総理訪伯では、日伯の全般的な戦略的グローバルパートナーシップ構築に関する共同声明に加え、海洋資源開発促進のための造船協力に関する日伯間の共同声明が発表されている。ブラジル沖ではプレソルト油田の発見が相次ぎ、その開発を国策として進めているが、大水深開発、大離岸距離輸送などの未踏技術を実現するとともに、

日伯両国の船舶海洋工学会の協力協定書調印式。フローリアノ・ピレス会長と大和裕幸会長（左）

大規模な生産・物流を担う造船業全体の強化が必須の状況となっている。このニーズに応えるために、日本の企業や大学が持つ技術力が貢献できるところは大きく、さらに、中長期的に造船業を支える人材育成でも日伯の大学や研究機関間でパートナーシップを築くことは、日伯双方にとって大きなメリットがあると考えられる。

昨年より、東京大学は大阪大学や九州大学とともに、サンパウロ大学、ペルナンブコ連邦大学、カンピーナス大学、リオデジャネイロ連邦大学等と連携して日伯海洋教育研究の協力を本格的に開始した。これには、ブラジルのペトロブラスやその重要な研究機関であるセンペス、日本側企業では先に紹介したIHIや三菱重工といった企業、そして両国の学会が連携しており、日伯産学官連携の取組みになりつつある。具体的には、東大とサンパウロ大学間の一部単位互換、東大教員によるサンパウロ大学での集中講義の実施、シエンシア・セン・フロンテイラスも活用したブラジル人学生の日本への大学の受入、協力企業の寄付による東京大学での寄付講座立ち上げとブラジル人インターンの受入などである。こういった人材育成の取組みと産業協力の取組みを並行して行っていけば、造船・海洋という非常に大きなビジネスと研究の分野で二国間の層の厚い信頼と協力関係が長期にわたって構築できるものと思う。

今回の安倍総理訪伯ミッションには、(独）日本学術振興会の安西理事長、(独）科学技術振興機構の中村理事長、(独）海洋研究開発機構の平理事長及び筑波大学の永田学長が参加し、それぞれの機関で取り組んでいる日伯協力案件や今後の見通しについて関係閣僚と意見交換したり、経済セミナーで発表したり、新たな協力関係の構築を表明したり、教育及び研究の分野での日伯関係の進展を多くの人々と共有できたと思う。これを機に、教育及び研究の分野の日伯協力が、今後益々両国の発展、ひいては世界の経済社会の発展に大きく貢献するような取組みに成長することを期待している。

日本は誠意では勝った
－W杯日本代表支援委員会報告－

伊与田 明（いよだ あきら／レシフェ日本文化協会会長）

レシフェの日本代表支援委員会

FIFAのW杯組み合わせ抽選会で、日本代表の第一試合がアレーナ・ペルナンブーコで行われることが決まった昨年12月6日から一週間後、サンパウロの邦字紙などメディア数社から「レシフェ文協としての支援取り組み計画」についての問い合わせがあった。実はこの回答が、その後の6か月間の仕事の始まりとなった。

年明け後の1月中旬、文協メンバー7名で日本代表支援委員会を立ち上げ、支援活動をスタートしたが、主な活動は大きく二つに分けられる。すなわち、応援グッズの確定と製作、そして緊急時の支援体制の確立、であった。

委員会メンバーで知恵を絞った結果、応援グッズとしては、①国旗（70cm x 105cm）50枚のほか、②日の丸手袋（使い捨て手袋に日の丸を印刷したもの）2万枚、③地元協力企業のロゴマーク入りのW杯日程表1万枚、で決定した。なかでも日の丸手袋は日本のマスコミでも注目されることとなったが、そのきっかけとなったのは梅田大使の3月レシフェ訪問であった。日の丸手袋をお見せしたところ、大変気に入っていただいたばかりか、日本サッカー協会（JFA）に直接働きかけていただき、その結果、JFAからレシフェに追加1万枚、ナタールに1万枚、クイアバにも1万枚と計3万枚が寄贈されたのだ。ちなみに、この手袋の配布は、レシフェでは、空港、スタジアムに一番近いメトロの駅、シャトルバス出発起点のショッピングセンターなどで行い、試合当日はスタジアム内で配ったが、いずれも文協会員がボランティアで行っている。

緊急時の支援体制については、レシフェ文協として日本語の話せる会員ボランティア30名を募集し、レシフェ出張駐在官事務所との協力体制で、6月14日、15日の二日間、24時間体制で対応したが、このなかには日本語のできる5名の医療チームも含まれていた。関係者が一番心配していたことは、対コートジボアール戦が夜中に終了してから、日本人サポーターたちがホテルにたどり着くまでの道中、とりわけメトロ出発駅やシャトルバス出発地点でタクシーも拾えず強盗の餌食になるのでは、というものであったが、軍事警察や国軍兵士が各所に配置されていたため、治安は維持され、大きなトラブルに巻き込まれたサポーターはいなかった。

応援グッズの行方

対コートジボアール戦は非常に残念な結果に終わってしまったが、私にとって日本の敗戦以上にショックだったのはスタジアムのなかで日の丸手袋がほとんど見られなかったことだ。3万枚の日の丸手袋はどこへ行ってしまったのか。

手袋は小さなものなので遠くから見えなかったのかもしれないが、正直なところ残念ながらあまり使ってもらえなかったのが現実だろう。これとは逆に、この試合で注目を浴びたのが、日本人サポーターが青色の風船のようなものを振って応援していたことで、初めてみた私にとっても実に新鮮な風景であった。この風船の正体はゴミ袋で、応援機能を終えたあとは、サポーターたちによるゴミ収集で本来の機能を果たし、日本人の心を世界中に示すのに一役かったことは各国で報道された通りだ。

日本代表のサッカーと日本人サポーター

レシフェとナタールで観戦した私としては日本人サポーターの熱心な応援ぶりに鳥肌が立つほど感動したが、日本代表が守備力も攻撃力も向上することを切に願うものである。

ブラジル PPP 法の難しさ

ブラジルは，近代国家としての歴史は長い。日本と同じシビルロー系の法制度をもつ。しかし，外国直接投資を呼び込むための法制度整備という面では，チリのような先頭集団にはいない。グローバル水準導入のための法改正も，ようやく浸透し始めた段階だ。本連載は，変化の激しいブラジル投資に関する法務面の話題を取り上げる。まずは官民パーナーシップによる公共事業方式である PPP から始めよう。

井口直樹
（弁護士。長島・大野・常松法律事務所パートナー。東京大学修士・スタンフォード大学 LLM。スペイン語を活かしラ米案件を取扱う）

ブラジル PPP 法（2004 年法 11079 号。副題は「公的行政における PPP の入札・契約に関する一般ルール」。PPP は“parceria público-privada”）は，PPP 推進の法的枠組みとして制定された。

PPP 法は，コンセッション法（1995 年法 8987 号）を前提とし，PPP の 2 つのカテゴリー：「スポンサー・コンセッション（Concessão patrocinada）」と「行政コンセッション（Concessão administrativa）」を定めた。

前者は，企業側がユーザーから受領する料金に加えて，公共側からも何らかの支払いを得るものを言い（PPP 法 2 条 1 項），後者は，公共側自体がユーザーとなるものを言う（PPP 法 2 条 2 項）。期間は，5 年以上 35 年以下とされ（PPP 法 5 条）ている（その他の詳細は紙幅の関係上省略する）。これら法令には準拠法の規定はないが，ブラジル法の適用を当然の前提としているのだろう。

二国間投資協定は使えない？

PPP に対する投資は期間が長いため，市場動向の変化はもとより，政府側の政策変更等により影響を受け，外国企業（投資家）側が不測の損失を被ることはかなりある。グローバルな実務での対策の第 1 は，コンセッションの条件や，オペレーション契約等に政府側の義務を具体的に記載し，また場合によっては税法・規制法等の内容を契約交渉時の一定時点のものに固定する条項等を導入することである。しかし，交渉は常に価値があるものの，入札公示の段階で契約条件が既定となっていることも多く，交渉による大幅修正には限界がある。

実務対策の第 2 は，投資受入国が締結している投資協定（2 国間の場合 BIT；北米自由貿易協定のような多国間協定もある）により，すなわち国際法の視点から政府の恣意的措置を「公正衡平待遇（Fair and Equitable Treatment)」違反として責任追及したり，最終的には投資仲裁に拠ったりすることが考えられる。しかし第 2 点では，外国投資を期待する中南米諸国（コロンビア，チリ，ペルー，メキシコ等。これら 4 か国とは日本も BIT 又は EPA 締結済み）が投資協定に積極的なのに対して，ブラジルは一切投資協定を発効させていない（14 カ国・地域と締結したが国会が承認を拒んでいる）。

2000 年以降件数が増大した投資仲裁にはインフラ関係の事件は多く，PPP プロジェクトへの投資家にとっては最終的な拠所となっているが，ブラジルに対しては難しいということになる。世界の投資法実務家・PPP 実務家が対策を考える必要があるし，ブラジルへのインフラ投資を検討する日本企業にとっても留意すべき問題である。

商事仲裁 - 新しい歴史

投資協定が使えないとなると，現時点での最終解決手段は商事仲裁ということになる。ところが，ブラジル仲裁法近代化の歴史はまだ新しい。国際標準である UNCITRAL モデル法を受容れたのは 1996 年仲裁法（1996 年 9307 号）からである。PPP 法では当初から仲裁の採用が認められたが，コンセッション法は 2005 年に改正され（2005 年 11196 号による 23 条の 2），初めて認められた。ただし，いずれも，仲裁地はブラジル・言語はポルトガル語に限定されている。ブラジル商事仲裁の問題と対策については追って解説する。

「パラベンスの子育て」

窪田直子（日本経済新聞社　文化部編集委員）

「パラベンス（おめでとう）！」――生後数カ月の娘を乳母車に乗せ、サンパウロ市内の道を歩いていた時のことである。見知らぬ年配の女性や若者グループがすれ違いざま、乳母車をのぞき込み、声を掛けていく。生んでよかったね。生まれてきてよかったね。たった一言に彼らのそんな気持ちがこもっている気がして、どれほど嬉しく、勇気づけられたことだろう。夫の海外駐在でサンパウロに暮らしていた私が市内の病院で娘を出産したのは2002年7月13日。それから帰国するまでの1年8カ月余り、子供好きのブラジル人には何度も驚かされた。

町のポルキロ（量り売りの食堂）で娘を片手で抱きつつランチ。すると隣のテーブルに座っていた女性が娘を抱きとり、私が食事をする間中あやしてくれたことがある。よほどの高級店でない限り、子連れで出かけてもイヤな顔をされることはまずない。どの店でも男女を問わず店員たちが娘に笑いかけ、乳母車の移動を手伝ってくれる。

「子供好き」という性質だけではなく、出産後の母子に対するケアが手厚いことにもつくづく感心した。出産の翌日に退院する際、生後1週間から毎週、生後1年からは毎月検診してもらえるかかりつけの小児科医を紹介された。初回の検診で手渡されたのは携帯電話の番号。「心配事があればいつでも掛けて」と念を押され、一気に不安が吹き飛んだ。

ブラジルではアレルギーに悩む人に出会ったことがない。日本ではあれほど多いのになぜ？と不思議に思っていたのだが、乳児検診を体験してみて腑に落ちた。母乳・ミルクから離乳食を始めるころになると、毎月、食べていいものといけないもの、調理の仕方から食べさせ方までを事細かに指示される。野菜と卵は早くに与えすぎるとアレルギーを誘発するため慎重に。8カ月になっても一切の魚介類と卵白、豚肉はダメと禁じられた。「ブラジルらしくない！」とツッコミを入れたくなるほど、徹底して手順通りに進めるのだ。

少子化に悩む日本が参考にできるヒントがブラジルには数多くあると思う。その根本は、どの子の誕生も心から祝福しようという「パラベンス」の心ではないだろうか。

ジャーナリストの旅路

インドとブラジル、比較すると

岩城　聡
日本経済新聞社ニューデリー支局長・元サンパウロ支局長

インドにいて、ブラジルのことを想い出さない日はない。というのも、ヒンズー教で神聖化され、街中を闊歩するインドの牛。実はブラジルのシュラスコで食した、背中のコブが特徴の「セブ牛」なのだ。マクドナルドにビーフバーガーすらない国で「あのクッピン、うまそう……」と、バチ当たりなことをつい考えてしまう。

インドとブラジル。昨今、新興国の雄として何かと比較される2カ国だが「違い」ばかりが目に付く。例えば「ワールドカップ」といえば、インド人にとっては3年に1度のクリケットのW杯だ。

インドでオモチャの取り合いをしている子どもが大人に褒められる言葉は「イッツ・マイン！（それ、私の！）」。自己主張が何より大事だと言われて育つ。極度の「ジコチュー」で「KY」な彼らに団体競技のサッカーなんて向かない。チーム戦のように見えて、1対1での個人技や記録こそ重要なクリケットが性に合う。

自国料理以外にも日本食、イタ飯と食べることに貪欲なブラジル人。これに比べて毎日どころか1日3食、365日カレーを食べたいインド人。旅行会社が「日本に行ったら食べたい料理は」と聞いたところ、1位が「インド料理」だったと嘆いていた。

違いが際立つ伯印両国だが、外交面では緊密化が進む。インド、ブラジル、南アフリカの3カ国で構成する「IBSAグループ」。BRICSやG20がある今、その意義低下が指摘されている。しかし「意図的」に中・露を省いた「民主主義国家」の枠組みは伯印とも居心地がよく、大切にしている節がある。

企業の動きもかまびすしい。航空機のエンブラエルはインド市場の開拓に向けパートナー企業を模索する。一方、インド二輪大手のヒーロー・モトコープは2016年までのブラジル進出をにらむ。両政府は、11年に90億ドル程度だった2国間貿易額を15年に150億ドルに引き上げる目標を掲げている。

5月に就任したモディ首相は、エネルギーの輸入依存を減らすために、ブラジルを模範にバイオエタノール混合ガソリンの普及を目指すようだ。近い将来、エタノール独特のあの甘い香りがデリーの街に漂えば……。やっぱりブラジルを想い出さない日はないんだろうな。

連載エッセイ

日伯の“架け橋”750人の物語

藤村 修
1949年生まれ。広島大学工学部卒。93年衆議院初当選。内閣官房長官など歴任。現あしなが育英会副会長

「日本とブラジルの“架け橋”養成に余生を捧げたい」 この齋藤広志先生（故人、サンパウロ大学教授）の執念に、日本側では玉井義臣氏（あしなが育英会会長）と私が呼応して、日本ブラジル青少年交流協会（以下日伯と呼ぶ）を発足させた。会長は当時の日商会頭の永野重雄氏、1976年のことである。以来、私は35回もブラジル訪問することになった。

日伯の主な事業は、日本の若者をブラジルに1年間派遣して「働きながらブラジルを学ぶ」というもの。1981年に1期生13人を派伯したが、当時は“サンバ研修”“サッカー研修”などを前面に出して外大生や大学サッカー部などを勧誘し、なんとか1期生派遣にこぎつけた。出発式には、当時の日伯中央協会田付景一会長にお祝いに来ていただき挨拶をしてもらった。率直な物言いで有名な元ブラジル大使の田付さんは、「どこの馬の骨かわからない協会で派遣される諸君は勇気がある。でもブラジルは面白いよ」と激励（？）してくれた。それから四半世紀の間に750人の大学生らをブラジルに送り出し、今や彼らは日伯両国だけでなく世界で活躍している。以下、OBたちのその後をできるだけ多く紹介したい（敬称略）。

松田浩（1期）はサッカー研修の先駆け。インテルナショナールに派遣し、本場のサッカーで揉まれ、帰国して広島のマツダに就職。そしてサンフレッチェでプロとしてプレイし、その後は指導者を目指しヴィッセル神戸で1部リーグの監督に就任。今も地方2部リーグで後進の指導にあたっている。サッカー研修では坂本康成（2期）、東川昌典（3期）と毎期続くが、ほぼ全員がJリーグプロや指導者として活躍している。変わり種は、田口禎則（5期）と奥村幹夫（7期）。田口は全日空に就職、実業団サッカーを経て、埼玉県議も経験し、現在日本女子サッカー協会専務理事を務める。奥村は損保の会社に就職し、サンパウロ社長として派遣され、今年のブラジルワールドカップでは、日本サッカー協会海外理事として日本代表の受け入れを現地で行った。

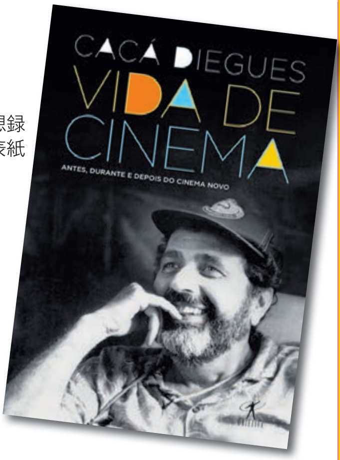
研究者の道を選んだ卒業生も多い。三石誠司（2期）は宮城大学教授、森幸一（3期）はサンパウロ大学教授、武田千香（4期）、浜口伸明（同）はこの協会機関紙に顔を出す。それぞれ東京外大、神戸大学の教授でポルトガル語、中南米経済の専門家。5期以降も金木正夫（ハーバード大学准教授）、佐保吉一（東海大学教授）から始まり大学の先生が十数人になった。さらに外務省など政府機関等でも多くの卒業生に出会う。武田浩幸（JICA）、櫻澤健一（警察庁）、守永信幸（大分県議）、今井真澄（交流基金）や小室千帆ほか数人が外務省に勤める。

マスコミ組も多い。上島誠司（1期）は朝日新聞記者を経て大学の先生に。篠田伸二（TBS）、小幡一夫（中国新聞）、小宮義彰（NHK）、村上憲一（日経新聞）など、その後も十数人のジャーナリストが生まれた。
そして他の多くの者が企業に就職。中には企業のブラジル法人代表まで昇進し、サンパウロでも何人かに出会う。鈴木裕之（1期）は日立現地代表で、日伯OBでつくる「架け橋の会」が派遣する学生を今も引き受けている。

ブラジル移住組も多い。若林健治（1期）、板垣隆（2期）、戸国達夫（同）はじめ各期でブラジル永住者が今や20数人になった。お陰さまで、今では日本とブラジルの関係で、日伯OBがあらゆる分野で登場し、それぞれ力を発揮しているのを目の当たりにして、日伯の仕事をしてきて良かったと振り返っている。読者のみな様にもどこかで日伯OBに出会うことがあればよろしくご指導をお願いしたい。

映画監督カカー・ディエゲスの自伝的回想録

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）



ディエゲス監督回想録
『映画の人生』表紙

1960年代以降の映像世界に多大なインパクトを与えた、ブラジル版ヌーベル・ヴァーグといえるシネマ・ノーヴォ運動は、ネルソン・ペレイラ・ドス・サントス、グラウベル・ローシャ、ジョアキン・ペドロ・デ・アンドラーデといった個性派映画人たちによって先導されたが、最も若い参列者ディエゲスが逃亡奴隷王国パルマーレスを舞台とする長編歴史映画『ガンガ・ズンバ』（1963年）を発表した時は、弱冠23歳であった。

それから半世紀、今やブラジル映画界を代表するベテラン監督となったカカー・ディエゲスも74歳になった。これまで制作･発表した映画の数は36本、そのうち20本が長編であるが、その映画人生を振り返った自伝的回想録がこのほど刊行された。構想から校了まで6年かけて書き上げた作品のタイトルは『映画の人生』で、サブタイトルは、「シネマ･ノーヴォ：以前、渦中、その後」だ。

彼の映画人生のスタートは、彼が6歳の時、アメリア叔母に連れられてマセイオ市のサンルイス映画館に入った時だった由だが、彼の映画作りに関わるエピソードが時系列的に“てんこ盛り”で書かれており、とにかく面白い。例えば、興行的に一番成功した『シカ・ダ・シルバ』（1976年）の場合をみてみよう。

植民地期の18世紀後半、ミナス･ジェライスのディアマンチーナに実在した女奴隷シカは、ポルトガル本国からやってきたダイアモンド公許管理者ジョアン・フェルナンデスのハートを射止めたことから、奴隷制社会の中で、黒人女性としては例外的に社会上昇していったが、この愛情物語を好演したのがゼゼ・モッタだった。踊ったり、ハダカになったりと、彼女の体当たり演技のおかげで、この映画は興行的に大成功、入場観客数550万人とディエゲス監督作品のなかでは最大動員数となったのだが、実は、この映画の撮影開始時期となっても、主演女優が決まらず焦っていたのだ。そんな時、当時無名だったゼゼが出演したミュージカルを見たことを思い出し、彼女を抜擢するのだ。

といった逸話や最初の妻ナラ・レオン（ボサ・ノーヴァの歌姫！）との思い出話などの合間に、ディエゲス監督の信念をあちこちに書き込んでいる。「私は人種というものを信じない、信じるのは、様々な文化であり、そうした複数の文化間の混淆に存する価値である」、と書く社会派映画監督が、父親（ジルベルト・フレイレの弟子に当たる人類学者マヌエル・ディエゲス）の知的DNAを受け継いでいることは明らかである。

実を言うと、筆者は第16回東京国際映画祭（2003年11月）に傑作『ゴッド・イズ・ブラジリアン』を引っ提げ参加したディエゲス監督に一時間ほどインタビューしたことがある。連日の強行スケジュールでお疲れの監督だったが、「監督作品にはラブシーンが少ないのは何故か」というような不躾な質問にも実に丁寧に答えてくれたので、感動してしまった記憶がいまだに鮮明である。この時、監督はご自身をどう自己規定するか、という意地悪な質問をしてみたが、一瞬考え込んだ監督からの答えは、「ブラジル知りたがり屋」、いや「ブラジルという地理的空間に限りない好奇心を抱いている男」だな、というものだった。

今回の分厚い（696頁！）自伝的回想録は、映像を通じてブラジル的アイデンティティーを真摯に追い求めた一人のブラジル人知識人による現代史証言ともいえよう。

時事論壇

食品は中国産よりブラジル産

和田昌親（当協会常務理事）

日本の企業はまだ懲りないのか――。中国産の消費期限切れ鶏肉が日本マクドナルドのチキンナゲットに使われていた事件を聞いて、思わず口をついて出たのがこの言葉である。

かつて何度も中国産の毒入り食品や汚染食材に悩まされ、その都度犯人探しをする羽目になったことを忘れたのか、とあきれてしまう。

ファミリーマートも同じ工場（上海福喜食品）から消費期限切れ鶏肉を輸入していた。肉の品質だけではない。テレビ映像では床に落ちた大量の肉を当たり前のように生産ラインに戻す従業員を映し出していた。

愕然としたのは「おいしい」との評判が高いモスバーガーまで中国産鶏肉を使っていたことだ。今回問題になった工場とは違うが、テリヤキチキン、モスチキンの原材料は中国産だった。この分だと外食業界が使う鶏肉の大半は中国産とみた方がいい。

日本マクドナルドは“被害者”然として中国の劣悪な品質管理体制を批判しているが、その前に中国産鶏肉をいまだに使っていたことへの反省がない。日本マクドナルドの責任も大きい。

そして使用する鶏肉は中国産からタイ産に切り替え、ブラジル産を使うことも検討するという。

ポイントはこの「ブラジル産も検討」というコメントだ。日本では地鶏ブームに乗って国産鶏肉の消費は増えている。しかし、そんな量では到底足りないから、鶏肉消費量220万トンのうち74万トンを輸入に頼っている。

輸入鶏肉のうち、唐揚げ、ナゲット、焼き鳥などの「調製品」はタイと中国からがほとんどだ。ところが生の鶏肉となるとブラジル産が9割を占め、日本にとっては最大の輸入国だ。

南米には鳥インフルエンザもない。日本マクドナルドはブラジル産を「検討」ではなく「使用」したらいいと思う。でも巷ではブラジル産も中国産と同じように「怪しい」と見られているようだ。ネット上ではブラジル産への疑念が専門家と称する素人によって流され、「ブラジル産鶏肉はブラジル人も食べない」との評があったりする。

反論したい。サンパウロで若鶏のチキングリルを食べた経験から言えば、それまで日本で食べたどの鶏肉よりもうまかった。

日本は鶏肉だけでなく、コーヒー、オレンジジュースなどのブラジル産食品を大量に輸入しており、ずいぶんと頼りになる存在だ。

今年のサッカー・ワールドカップで渡伯した日本人サポーターたちも、ブラジルの食品の種類の多さと質の高さに驚いたに違いない。詰まるところブラジルの食品が知られていないだけなのだ。

話を中国に戻そう。この国との付き合い方は本当に難しい。政治面では領土問題や歴史認識でケンカしているが、経済や文化交流が細ってしまえば未来志向の関係ができないと多くの知識人が言う。

これまではそういう「大人の関係」（戦略的互恵関係という）が希望を込めて語られてきた。だから「政冷経熱」（政治は冷え込んでも経済関係は活発）などという言葉も出来た。

しかし、昨今の両国の関係はそんな生易しいものではない。21世紀はさしずめ「政冷経冷」である。実は中国ビジネスに関する限り、この手の「経冷」が異常に多い。中国から帰ってきた日本企業の幹部の多くが「未収金が多く、なかなか回収できないんだ」と対中ビジネスの難しさを説く。

加えて、最近では中国駐在を嫌がる社員が増えているらしい。当然だろう。小さな子供を連れていくには環境汚染がひどすぎる。治安は悪くないが、その分交通事故などに遭う確率は高い。

それでも中国を捨てられないのは世界最大の市場という認識があるからだ。中国市場を重視する企業は多く、とりわけ自動車メーカーは激戦区と知りつつ戦場に飛び込んでいく。

しかし中国に代わる市場があれば苦労して進出することはない。早くブラジル市場の大きさに気付いてほしい。日経新聞の外食産業を対象にした最新のアンケート調査によると、中国からの食材輸入を減らせないと答えた企業の大半は「代替調達の国がない」ことを理由にしていたという。安倍首相が8月に訪伯した際、70社の日本企業トップが同行したという。物見遊山でなければ、彼らはブラジルから何かを感じたはずである。

（このコラムは随時掲載します）

最近のブラジル政治経済事情

―外務省中南米局提供情報並びに現地メディア報道他より―

カンポス候補の事故死により激変する大統領選挙戦

今後の大統領選挙日程は、7月6日：選挙キャンペーン開始、8月19日～10月2日：政見放送、10月5日：投票（単独過半数を獲得しなければ決選投票へ）、10月11日～24日：政見放送、10月26日：決選投票、となっており、小党からの候補も合わせると、合計11名の候補者により争われることになった。

8月7日放送のグローボTV（ジョルナル・ナシオナル）が報道した、IBOPE社による大統領選挙及び政府支持率に関する世論調査によれば、各候補の支持率は下表の如く推移していた。

7月の調査は、IBOPE社がW杯閉幕後に初めて実施したものであったが、その二週間後に行った8月調査においても、各主要候補の支持率は、いずれもプラスマイナス2％の誤差の範囲内であり、ほぼ横這いといえた。

	5月	6/7	6/17	7月	8/7
ルセーフ大統領（PT）	40%	38%	39%	38%	38%
ネーヴェス上院議員 (PSDB)	20%	22%	21%	22%	23%
カンポス前ペルナンブコ州知事 (PSB)	11%	13%	10%	8%	9%
他候補の合計	5%	7%	9%	7%	6%
白票／無効票	14%	13%	13%	16%	13%
わからない／無回答	10%	7%	8%	9%	11%

このIBOPE調査によれば決選投票になった場合の支持率は、（1）ルセーフ大統領41％⇒42％、ネーヴェス議員33％⇒36％、（2）ルセーフ大統領41％⇒44％、カンポス前州知事29％⇒32％となっているので、いずれもルセーフ大統領のほうが対立候補よりも6ポイントから12ポイントほど優位にたっていた。すなわち、W杯準決勝の対ドイツ戦における惨敗は支持率全般には影響を与えなかった。

こうした選挙予想も、8月13日朝発生した、カンポス候補の事故死により激変することになる。同候補が搭乗していた小型飛行機がサントス市住宅街に墜落・炎上してしまったからだが、全候補の選挙キャンペーンは一時ストップ状態となってしまった。

同候補と組んで副大統領候補となっていたマリーナ・シルヴァ元環境相は、自身が立ち上げた環境保護主義政党が正式認可を取得できなかったため、PSB（ブラジル社会党）に合流した人物だが、4月初めに実施された、女性候補同士の選挙戦となったら、という仮説への世論調査では、ルセーフ大統領39％に対しマリーナ候補27％という高支持率を得ていた。彼女が亡きカンポス候補の代替として大統領候補に決まれば、単なる“弔い合戦”的様相とは全く異なる展開となることは必至である。

これは役に立つ！　会員へ2つの耳より情報

新企画Ⅰ

２時間無料　出前スタイルの赴任前研修

当協会はブラジルに進出している、あるいは進出計画がある法人・個人会員を対象に「出前スタイル」のオーダーメイド赴任前研修を行うことにしました。グローバル人財育成と危機管理の視点でベテラン講師が貴社事務所やご指定場所に出向き、２時間無料講義をいたします。

■**講義内容：**社員並びに家族向けのブラジル赴任前研修。ブラジルという異文化社会の理解、現地生活事情、渡航事情、危機対応など。

■**講義費用：**2時間まで無料。3時間以上は有料（1時間増せば1万5千円）。

■**申込資格：**法人、個人会員（非会員の場合は有料）。年間何回でも受講可能、会員の希望を尊重します。

■**申込方法：**協会事務局へご連絡ください。

■**講師プロフィル：酒井芳彦、**当協会常務理事＝味の素（株）勤務経験。ブラジルの２回駐在を含め海外駐在歴26年。ブラジル永住ビザ保持。現在他社の国際アドバイザーとしてグローバルに活躍中。

新企画Ⅱ

なんでも無料　経営コンサルティング

もうひとつの会員向けサービスは無料経営コンサルティング。今後ブラジル進出を考えておられる企業にブラジル固有の経営上の問題や経営戦略を指南します。長年ブラジルでの経営に携わってきた当協会のベテラン講師が会員のために、無料でコンサルティングします。すでに20社以上の企業と実績があります。

■**ご相談内容：**１税金対策、２コマーシャルリスク対策、３高金利対策、４労働問題対策、５ブラジルの朝令暮改への対応策、６ブラジル進出はＭ＆Ａか単独か、７経営に不可欠な人脈紹介など。

■**申込資格：**当協会の法人会員に限定（非会員の場合は会員加入すれば相談可能）

■**申込方法：**協会事務局へご連絡ください。

■**講義費用：**無料

■**講師プロフィル：筒井茂樹、**当協会常務理事＝元伊藤忠ブラジル社長、元日伯セラード農業開発推進会社ＣＡＭＰＯ社副社長、ブラジル駐在合計28年。

イベント 新刊書紹介

◆◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆◆

『首都ブラジリア モデルニズモ都市の誕生』
（中岡義介＋川西尋子著）

1960年に遷都されたブラジリアは、ブラジル内陸部開発構想の史的基盤を背景に構築された都市であるが、1957年実施の新首都設計コンクールで入賞したルシオ・コスタ案はモダニズムの結晶であった。原資料を渉猟した著者たちは、このブラジリアの「快適さ」を解き明かすべく、ブラジル史を再解釈し、ルシオ・コスタの知的形成史を読み解いていく。理系と文系両方の複眼的視点からのブラジル版モダニズム研究の成果である。
（鹿島出版会　2014年6月　312頁　3,800円+税）

『ブラジル人の処世術 ジェイチーニョの秘密』（武田千香著）

ブラジル流社会遊泳術を象徴するキーワード、ジェイチーニョが、国語辞典に初めて掲載されたのは1982年とつい最近であり、リオ市民が使い始めたのが1950年前後と推定される。文化人類学者や社会学者による先行研究を咀嚼したうえで、自身のブラジル体験とブラジル文学研究の経験をカクテルして構想された、ジェイチーニョ研究試論。ジェイチーニョとは無縁のブラジル世界にも目配りした試論は、なんとも説得力がある。
（平凡社新書　2014年6月　212頁 760円+税）

◆◆◆◆◆◆ イベント ◆◆◆◆◆◆

第29回ランチョン・ミーティング
日時：2014年9月3日（水）12:00-14:00
講師：二宮康史氏（アジア経済研究所副主任研究員）／**演題**：近年におけるブラジル中小企業の成長と日本企業の対応／**場所**：ラ・ロッシェル山王店（東急キャピタルタワー1階）
交通：東京メトロ銀座線・南北線「溜池山王」駅下車／**参加費**：会員5,000円　非会員6,000円（当日会場にて申し受けます）
ドレスコード：カジュアル

外務省中南米局長講演会
日時：2014年9月18日（木）13:15-14:45
講師：山田彰氏（外務省中南米局長）
演題：安倍首相のブラジル訪問同行報告
場所：フォーリンプレスセンター6階会見室
交通：東京メトロ「霞が関」または「内幸町」駅下車

ウエキ元大臣講演会
日時：2014年10月9日（木）15:00-16:20
講師：シゲアキ・ウエキ氏（元鉱山動力大臣、元ペトロブラス総裁）
演題：大統領選挙後のブラジル政治経済の展望／**場所**：フォーリンプレスセンター6階会見室

第30回ランチョン・ミーティング
日時：2014年10月15日（水）12:00-14:00
講師：パウロ・ヨコタ氏（元ブラジル中銀理事）
場所：アークヒルズクラブ（アーク森ビル イーストウイング37階）
交通：東京メトロ南北線「六本木一丁目」または銀座線「溜池山王」駅下車
参加費：会員5,000円　非会員6,000円
ドレスコード（男性）：ジャケットをご着用願います

hispánica

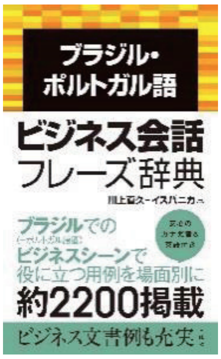
スペイン・中南米との架け橋として20年
スペイン語・ポルトガル語の イスパニカ
www.hispanica.org

ことばを学ぶ人にも、ビジネスマンにも、高品質で充実のサービスを提供いたします

通訳 翻訳
ビジネスから文芸まで経験豊富なプロがクオリティの高いサービスを提供
取扱い言語：スペイン語・ポルトガル語
英語・フランス語・ドイツ語
イタリア語・ポーランド語

語学スクール
初心者はもちろん、中・上級者向けコースも充実の溜池山王教室
www.hispanica-academia.org
・通学
・通信添削
・オンライン　※ポルトガル語は通学のみ

書籍の執筆・編集
赴任、出張にはこれ！
安心のカナ発音
英語付き。



ミニマム文法やミニ辞典も掲載。
三修社刊

中南米の情報提供
スペイン通信社EFEの情報をもとに中南米の最新ニュースを日本語で
・中南米経済速報（週刊）
・政治・治安情報 “CRONICA”
（月～金の毎日）

企業語学研修
ニーズに合わせた効果的な研修
粒ぞろいの講師が、ビジネスを成功に導く語学力習得をとことんサポート。実践的なコミュニケーション力を最大限ひきだすレッスンをアレンジします。

（有）イスパニカ　〒107-0052 東京都港区赤坂 2-2-19 アドレスビル1F　（銀座線・南北線「溜池山王」駅8番出口前）
Tel.03-5544-8335　Fax.03-5544-8336　hola@hispanica.org

グローバル人材の採用なら

日経ＨＲは、日本経済新聞グループの人材情報企業として、新卒向け就職事業、社会人向け転職事業、キャリア教育事業をメインに展開しています。
日経ＨＲ独自の情報に加え、日本経済新聞社や日経ＢＰ社のコンテンツをベースに就職活動、学び、スキルアップ、キャリアデザイン、転職などのＨＲ（Human Resources）情報をインターネットや出版、イベントなどのクロスメディア展開により発信していきます。

日経キャリアNET

社会人のための転職サイト。日本経済新聞や日経・電子版、日経ＢＰ社の各種専門媒体を入り口としたビジネスに意欲の高い求職者と、人材を企業戦略の中核と意識する優良企業を結びつけます。

日経キャリアNET
http://career.nikkei.co.jp

キャリアコンサルティング（人材紹介）

エグゼクティブ、金融、ＩＴ系人材を中心に、人と企業をピンポイントで結ぶ人材紹介事業を展開しています。日経キャリアＮＥＴや日経グループ各媒体との連動やアライアンス・エージェントとの連携など、さまざまなご提案も行っています。

日経HR Executive

プロフェッショナル、エグゼクティブのための転職支援サービス

20代、30代のための転職支援サービス

日経HR NIKKEI HUMAN RESOURCES AGENT

日経アジアリクルーティングフォーラム

2013年8月に第1回フォーラムを開催。1885名の現地事前登録から、マレーシア、インドネシア、タイ、フィリピン、中国、ベトナム、シンガポールのアジア7カ国の80名のトップ学生を日本へ招待。内21名が本社採用となりました。今年も規模を拡大して、8月に開催いたします。

NIKKEI ASIAN RECRUITING FORUM in 東京

日経メディアで複合プロモーション

日経新聞・日経電子版、日経BP専門媒体（雑誌・Web・メルマガ・フォーラム）を活用した日経メディアの複合プロモーションで人材採用活動をお手伝いします。

日本經濟新聞

仕事の先の幸せを創造する会社

日経HR
NIKKEI HUMAN RESOURCES

お問い合わせ　株式会社日経HR　TEL:03-6812-7307
e-mail:webeigyo@nikkeihr.co.jp　https://www.nikkeihr.co.jp